

海外派遣研修プログラム タイ (マヒドン大学ラマチボディ病院)

医学科 平成 22 年度入学 建部 将夫 (派遣期間 H26.4.7~5.2)

私は 2014 年 4 月 7 日から 5 月 1 日までの一か月間、タイのバンコクにあるマヒドン大学ラマチボディ病院で実習させていただきました。一か月のうち二週間は感染症科、残りの二週間は家庭医にて勉強させていただきました。私がなぜタイを留学先に選んだかという、一つは英語力の向上です。タイでは医学生は英語の教科書を使って勉強しており、医師のほとんどは英語を自由に話すことができます。もう一つの理由は熱帯地方特有の感染症を勉強したいと考えたからです。

感染症科では毎日回診に同行させていただき、各患者の状態や問題点、治療方針などを説明させていただきました。そこにはたくさんの HIV 患者が入院しており、多くの症例を経験することができました。日本ではほとんど HIV 患者に接する機会がありませんでしたのでとても良い経験になりました。その他にも結核、サイトメガロウイルス感染症、ヒストプラズマ症など東南アジアに多い感染症にも触れることができました。

家庭医では多くの講義や実習をさせていただきました。最も印象的だったのは往診です。日本では大学病院の医師が往診に行くことはありません。よって私はほとんど往診の経験がありませんでした。タイでは医師、看護師、ソーシャルワーカーなどのスタッフが一つのチームを作って往診に行きます。患者は様々な理由で入院、通院ができない方々です。私が同行したときの患者は認知症を患った高齢の女性でした。娘さんが介護を行っていたのですが、彼女自身も介護で精神的に疲れており、患者に対して何かをすることに対して恐怖心を抱いていました。そこで先生方は患者である高齢女性の処置をしつつ、娘さんとお話をじっくりとさせていました。後にどういった話をしていたのか聞いたところ、娘さんは自分の主張ばかりしており精神的に不安定な状態だったので、落ち着かせつつ今後の方針に関してお話されていたそうです。その後娘さんは先生に教えてもらいながら患者の口の中の掃除を練習することができました。これはこの家族にとって大きな一歩だったと思います。また私はこのことから家庭医が対象とする患者は、患者本人だけでなく、その家族や周りにいる人々も含まれるということを知りました。

今回の留学実習を通じて医学知識や語学力を向上させることができたと思います。またタイの文化にもたくさん触れることができ、人生経験という意味でも非常に良かったと思います。またタイの友人もたくさんでき、彼らとは現在も交流があります。これは私の人生の宝だと思います。

